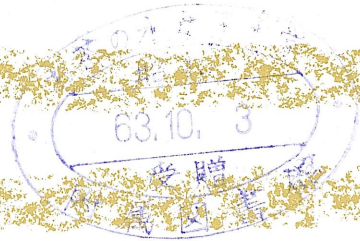


家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

1988

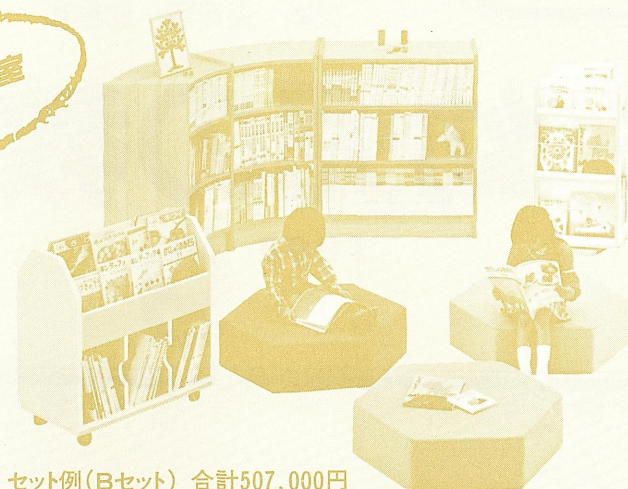
9



# 組み合わせ自由。 夢は無限に広がります。

フレール館の  
オリジナル図書室  
システム

スペースにマッチ。  
予算にマッチ。  
子供の気持ちに  
ぴったりマッチ。



セット例(Bセット) 合計507,000円

## スペースに合わせた図書コーナー

- 幼児教育に実績をもつフレール館が開発した図書室システムは、現在あるスペースに合わせてられる、システムファニチュアです。組み合わせは自由自在、単品でも使えます。保育室の図書コーナーから図書室の総合レイアウトまで、お好きな形でご利用いただけます。もちろんレイアウトの変更も思いのままです。書架とイス、テーブル、ソファ、マットなど必要な数だけセットするわけですから、費用の点でも無駄がありません。

## 19種類の中からスペース・ご予算に合わせてお選びください。

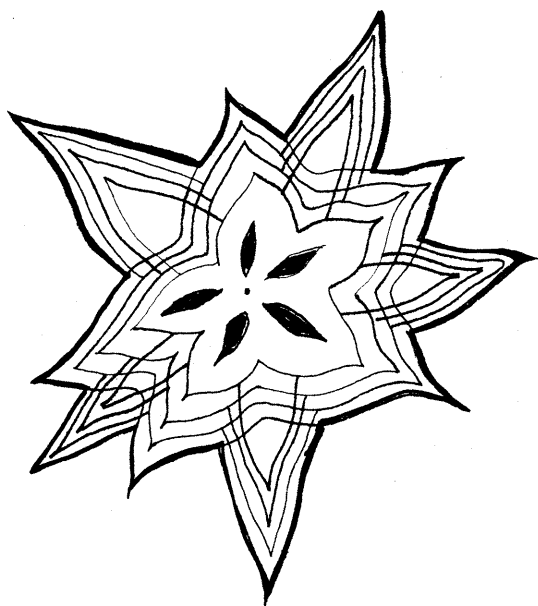
システム書架・直線/システム書架・曲線/システム書架・コーナー/システム書架・台形/書架ワゴン/ソファーマット・A/ソファーマット・B/ソファーマット・六角/L型ベンチ・大/L型ベンチ・小/テーブル/書架ベンチ/書架/アンパンマン書架/大型回転マガジンラック/1連書架・窓下傾斜/2連書架・窓下傾斜/1連書架・傾斜/2連書架・傾斜

## フレール館が選んだバラエティ豊かな本のラインアップ

学校図書館選定図書を中心に幼児に適した本も、フレール館で一括して購入できます。ぜひご利用下さい。

〈わくはくは、担当営業マンにご相談ください。〉

# 幼児の教育



第八十七卷

第九号

幼 児 の 教 育 目 次

——第八十七卷 第九号——

© 1988

日本幼稚園協会

〈巻頭言〉

「ヒトとモノ」から「ヒトとヒト」へ……………阿部 志郎…(4)

関 心……………津守 真…(6)

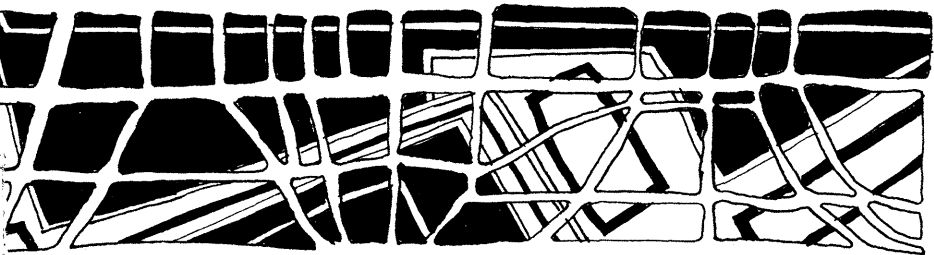
図書紹介

「女性の自己実現——こころの成熟を求めて」……………中村 弓子…(12)

数学の本？……………国越 健司…(17)

S F 的読み解き 子どもという風景

第四十一回 さまざまな呼び声……………堀内 守…(23)



子どもと(6)

九月・外へ……………清水 光子…(33)

共に育つ……………稲岡 康好…(40)

臨床の現場から 子育てを考える その4

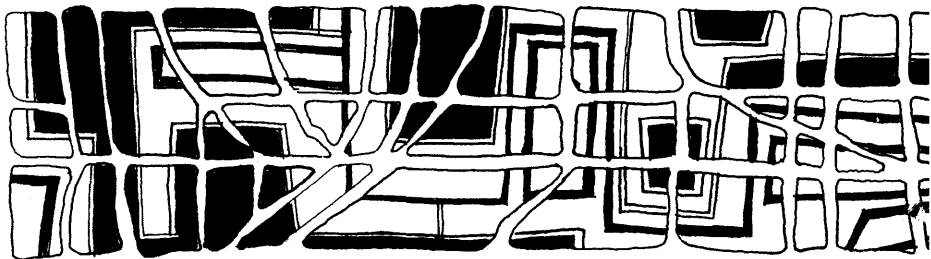
感情のコントロールを知らない子どもたち

——家庭内暴力の事例から——……………鮎田 典子…(46)

若いお母さんたちへ

子育ての輪……………はるにれの会 榎田 二三子…(56)

カット・福田 理恵  
編集部・向山 陽子



「ヒトとモノ」から「ヒトとヒト」へ

阿部 志郎

私の町の子どもたちが、隣町の塾から帰ってくるのは、夜九時半のバス。母親が夕食を塾に差し入れにいく姿をみかける。

ある学校の報告によると、小学高学年生が、塾やけいごごとに通っている回数は、一週平均五・七回という。学校に行くのと同じ回数ではないか。

子ども同志が、手帖を出してスケジュール調整している場面にぶつかってドキッとさせられたことがある。

子どもたちは忙しい——。親にふりまわされているのか、逆に親が子どもにふりまわされているのか。いや、親も子ども社会にふりまわされていると言うのが正

確であろうか。

要するに、いまの子どもは、「遊び」を楽しむ環境に恵まれていない。

①遊ぶ時間がない、②遊ぶ場所がない、③遊ぶ友達がいない、④遊び方をしらない、が子どもの問題として指摘できる。

勿論、子どもだから全く遊ばないわけではない。それでは、なにをして遊んでいるのか。

漫画にテレビにファミコンの三つに代表される。

この遊びに二つの共通点がある。

一つは、テレビというモノと子どもの関係が、子どもの世界を占めているといわなければならない。

「モノ」と「ヒト」の関係を、いかに「ヒト」と「ヒト」の世界に取り戻すかが教育課題として登場してくる。ヒトとヒトのふれあいが重視される背景が、ここにある。

もう一つの特徴は、ひとりだけで遊べることにほかならない。

友達や家族がいると煩わしい。友達が新しいソフトをもっているから、遊びに行く。

大都市の教育委員会は、友人が二人以下の小学生が二七%との調査を発表している。すなわち、こどもは、「個室化」とか「孤立化」とよばれる現象に直面しているといえよう。

このような「社会」の状況から、どうやって、こどもを解放できるかが問われるのである。

言うまでもなく、抜本的には、教育システムの問題であり、生産性を基盤とする産業社会が要求する力と富と効率の人間像を変えない限り、こどもに幸せが訪

れることはない。

それは社会体制にかかわることなので、ここで論じてはじまらない。

しかし、幼児は、小学生の予備軍であり、幼児を待ちうけている環境を考えると、身近なところで最善を盡す努力を払うことが大事なのではなからうか。

それには、ヒトとヒトの出会い機会をふやすこと。「ヒト」は、できるだけ老人や障害児をふくめ多様にとらえること。そして、「遊び」を大切にすること、を強調したい。

幼稚園、保育所が、遊びを通して社会性を広くし、こどもが多様な人間関係を体験し、可能性の芽を伸ばし、個性を育てる貴重な場であることを理解したいものだと思う。

保育施設だけでなく、家庭も地域社会も、幼児の人間性を高め、社会関係を豊かにする創造的営みに協働してほしいと願ってやまない。

(横須賀基督教社会館)



# 関心

津守 真

新学年のはじめには、高い所に上ったり、流しのふち、トランポリンのへりなど不安定な所を歩き、私が近寄ってもほとんど関心を示さないようにみえた四歳のA子は、二か月たったいま、私のところに泣いて寄ってきたり、ふと気がつくと私の後に立っていたりする。

きのうはシーソーの上に立ち、私の手につかまって何度もシーソーを揺らしてたのしんだ。壁際の、足の幅ほどの線の上を歩くのが好きなのだが、足を滑らせワッと泣いて部屋の中央に向かって走った。私が近寄って抱きかかえると私の膝に坐り、びったりと身を寄せて泣きやんだ。挫折して自分がどうしてよいか分からないとき、人に助けを求めらることをせずにはふらふらと歩きまわる子どもは、霧の中のように自分自身の喪失感を感じているのだろう。一瞬の後、この子どもは私に身を寄せて安定した自分に立ちもどった。いま、この子どもは私の存在に気付き、関心を寄せはじめています。



このような現在、四月のはじめ頃の人に対する無関心な状態をふり返ってみると、その頃もこの子どもは私に対して全く無関心というわけではなかったのだろうと思われる。裏庭の滑り台の上に立ってどこか遠くを眺めているとき、私が近くにいても私などいないかのように振舞っていたのだが、「あなたはこの小さなわたしなど本気に一緒にあそびでなくかくれないでしょ」と思っていたのではないかと私は察する。実際、四月ははじめ新しい子どもが何人もいて、他の子どもたちのことが気になり、このよそよそしい子どものところは長くとどまっていることはできなかった。ちょっと立ち寄っては、じきに私は他の子のところに立ち去った。こういうとき、私は担任として手落ちがないようにと気にしており、(それも必要なことなのだが、)ひとりひとりの子どもに人間的関心を向ける余裕がなかったのである。

数週間たった頃、私も自分のクラスの親子のことが次第にわかってきて、ひとりひとりの子どもと出会ったところでゆっくりと交わるゆとりができてきた。この四歳のA子と長い時間つきあったはじめは、五月半ばに裏庭の滑り台の上から他の子どもが水を流し、あたりを水だらけにしたときである。A子はその滑り台を下から登り、立ったままで斜面を走りおりようとした。私はいそいでA子を支えた。滑り台の下の水たまりでA子はしばらく遊ぶとまた同じことを何度もくり返した。水たまりがあるとA子はきつととんでゆくから、斜面の下にたまった水はA子にはとくべつ面白いらしい。滑り台を立ったまま走りお

りようとするのは、人に支えてもらいたいというA子の表現かもしれない。私は、斜面を走りおけるA子を何度も支えて過ごすこの時を、子どもにとって意味ある時と思い、長い間そこで一緒に過ごした。

こうして私がこの子に関心を寄せ、この子も私に関心を向けるようになってきた。関心を寄せるというのは、危険がないように傍に居るのは違う。自閉症児にはスキンシップが必要だから傍についているというような公式的理解の仕方とも違う。その子のしている行為がその子にとって意味があることを認めて傍に居ることである。この幼い子どもはその人間形成の原初的段階で、身体水準での自分自身を形成する過程を歩んでいる。その真剣な努力に対して、私は関心を寄せる。

はじめは好奇心や研究的興味から、ある子どもの奇妙な行動に関心をもち場合があることを否定はできないが、次第に子どもの側からの見方に関心を寄せることによって、子どもは、その人から自分が人間として関心をもちたれていると感じるようになるのではなからうか。

子どもが毎日を自分の人生として自信をもって歩むようにと、私共は子どもの行為のひとつひとつに人間的関心を寄せる。

先日、私はある幼稚園の公開保育に参加する機会があった。私はいくつかの部屋を回って三歳児の部屋にきたとき、丁度、降園の支度をしていた。片隅のたたみのコーナーで横

になっている男児にまわりの数人の子どもたちが「オキロー オキロー」とどなっている。見るとその男児は目をつぶり眠っているようにみえた。眠っているときに起こされたら可哀想と思い、「赤ちゃんねんねしているから」とふとんをかけてそっと叩いた。そうすると女の子が「あたし赤ちゃんじゃない、大きいお姉さんだもん」と抗議する。「大きいお兄さんをやさしく、ねんねんようとなかしてあげましょう」というと、大声を出していた子どもたちも少し穏やかになった。「ねていると夢をみるね」と私がいうと、子どもたちはケーキの夢、怪獣の夢など口々に話しはじめ、ひとしきり夢の話になった。もう大声でどなって起こすのではなく、夢をみているかもしれない眠っている子どもにもふとんをかけて、なかしてあげようとする空気になっていた。間もなく、まわりの子どもたちは椅子に坐り、紙芝居を見にいった。

ふと気がつくと、眠っていた男の子が細く目を開いて私の身体にすり寄っている。その子は眠っていたのではなかったらしい。周囲に無関心を装い自分の世界を守っていたものと思われる。オキローと大声でいわれたとき、周囲から寄せられたその「関心」はこの子にとっては煩わしく思われたのだろう。この子は一層自分の殻に閉じこもった。自分の中に沈潜していたそのときの気持ちを察して、静かになかしておいてあげようとの関心の向け方に対して、このこどもは自分の関心を返し、私の傍に寄り添った。それからその子は畳に落ちていた小さな紙片を、次々に私に手渡し、私の掌が一ぱいになると自分から立ち上って紙芝居を見に皆の輪の中に入っていた。帰り際にこの子どもは、私の掌から紙片

を取り、屑かごに捨ててこのできごとを自分から完結させた。あとできくと、この日は朝からこの子どもは参観者を気にして、保育室の片隅に自分の位置をきめていたとのことだった。人間に敏感なこの子は、一時的にはあるが、周囲に対して無関心を装って自分を守ろうとした。その子どもは片付けから降園への社会的適応への要求に対しては応答しなかったけれども、その子の世界への人間的関心に対しては心を開いたのであった。

子どもたちの中にとると、人に関心を向けるというのはどういふことを考えさせられる機会が多くある。最初に述べたA子のように、関心がないように見えながら、人に対して関心をもっている場合も少なくない。直接に話しかけたり誘いかけてたりしてくれないけれども、行為によってその関心は表現されている。A子の場合、流しのふち、トランポリンのヘリ、壁際の線など不安定なところや落ちそうな場所を選んで歩いた。大人の顔も見ずにひとりやっっているから、人に対して関心がないのかと思ってしまうが、日がたつにつれて次第に分かってきたように、人が関わってくれるようにと危なげなところを歩くのである。

それでは子どもの傍にいきさえずればいいのかというところではない。「危い」といっておろそうとするとその手を払いのけて拒否されたりする。社会に適応できるようにと期待とあせりをもって傍に居るとき、大人の顔に微笑があっても、子どもはそれを煩わしく感じるのではなからうか。関心をもつということは、子どもの外面的部分ではなく、子

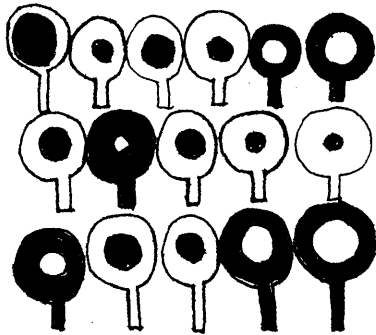
ども自身が生きている生活、及びその意味に対する関心のことである。

もうひとりの幼稚園での子どもの場合、この子が周囲に対して敏感なことは、はじめの訪問者には分からなかった。私はこの子は本当に眠っていると思っていた。周囲の子どもの声はこの子にとっては他者からの温かい関心とはいえなかった。その子どもたちが帰る支度へと事態を進行させることなく、その子の世界を大切にすることへと関心を転じたときに、この子どもは周囲の社会を自分が生きる世界として受けとることが可能になった。

他者に関心をもつことは、愛することと言いかえてもよい。愛は、他者の行為の中に、

その人にとっての意味を見い出す知性と、惜しむことなくそれに応答する身体行為とを含む。それに対して、大人の側の一方的期待や要求からの関心は、愛を騒々しい干渉へと変えてしまう。

(愛育養護学校)



玉谷 直美著

『女性の自己実現』

こころの成熟を求めて

(女子パウロ会)

中村 弓子

著者はキリスト者であると同時にユング派の心理療法家であり、その二つの立場を不可分のタテ糸とヨコ糸として、女性の自己実現の問題を考えたのが本書である。

ユングに倣って著者は、心の意識されている部分の中心を「自我」と呼び、無意識的な部分までを含めての心の全体の中心を「自己」と呼ぶ。そして、自我のしがらみを外しながら、自己との対話を続けてゆくことによって心の全体性が開発され、自由で成熟した人間性が獲得される、それを自己実現と呼んでいる。

実人生において、そのような自己実現は、古い自我が自己の本性に否定されて新たな自我に生まれ変わる「死と再生の論理」として体験されるものであり、また、みずからにおいて死ぬことにより他者との新たな愛を得る「愛情の論理」として体験されるものでもある。

本書の冒頭にはそのような体験の、単純ながら含

蓄の深い具体例が示されている。

ある幼稚園児が給食の牛乳をどうしても飲まない  
ので、業を煮やした先生は母親を呼び出して、この  
子はわがままに育てられすぎているから、お母さん  
が努力するようにと衆目の前で説教をした。教師で  
ある母親は恥ずかしさと悔しきでいっぱいになって  
家に帰ると、牛乳を飲む練習をさせ始めた。毎日同  
じ努力を続けたが男の子はがんとして口を開けな  
い。そうしたある日、母親はこの子が二歳のころの  
ある出来事を思い出した。家はお手伝いさんに任せ  
ていたが、このお手伝いさんがたまたま牛乳が大嫌  
いな人だった。しかし母親から言われていたので三  
時には牛乳を飲ませていた。ところが、ある日この  
子が牛乳を吐いてしまい、その吐いた牛乳の匂い  
に、お手伝いさんは子供をはねのけて「よくこんな  
臭いものを飲んでいられるね!」と言ってしまっ  
た。この子はその日からぱったりと牛乳を飲まなく  
なってしまうたのである。この出来事を思い出すう

ちに母親は、「牛乳が飲めなくなった」という事実  
の中に、頼れるただ一人のお手伝いさんに拒否され  
た子供の心の痛みと、母親から当然受けなくてはな  
らないお乳のように甘く暖かい愛情が与えられなか  
ったという子供の悲しみに気づくと、不思議なほど  
子供に対する暖かい感情が溢れてきた。教師として  
の責任感の強いこの母親は、わが子に対する情に溺  
れていては仕事ができないと、無意識に自然な愛情  
を抑圧してきたことを感じて痛悔の涙にくれた。し  
かし、その後この母と子の関係はがらりと変わっ  
た。牛乳を飲む練習をさせる執拗な熱心さはなくな  
り、子供に対して自然で暖かい接し方ができるよう  
になった。この母親は愛情を抑圧してきた自分の心  
の固さに気づいたとき、以前の自分を否定したので  
ある。そして新たに生まれ変わった目でわが子を見  
たとき、わが子もまた生まれ変わっていたのであ  
る。

だから真に生きるためには生がつねに死を含んで



いることが必要であり、女性の一生の転換期には必ずこのような「死と再生」が伴う。本書の第二章「処女である花」、第三章「実りある母」には、娘から結婚を経て母親に至る女性の一生の決定的な局面における「死と再生」のありようとあらねばならぬ姿が、筆者の心理療法の実例と神話や物語を通じて考察されてゆく。

女性の一生の流れは結局、娘時代の自己愛から、この自己愛に死ぬことによって真に実りを結ぶ母性



への再生の流れであると言える。母親は子供をいくしみて、いやし、憩いを与えることによって、子供と世界をつなぐ環となる。地母神信仰に見られるように、母性とは文字通り肉体的にも「死と復活の器」として、女性の自己実現の成就の姿ともいえる。しかしまた、母性は自分の欲望のとりことなつて子供を食い殺す否定的な特性をも持っている。自我に死ぬことのない母性は他を死なせてしまう。だから母性が成就するためには自我のはからいに死

ぬ、謙虚な母の悲しみが必要なのである。

女性の一生を通じてのこのような自己実現の体験は、すべてを受容する器としての「からだ」を基盤とすると同時に、「からだ」が受容した直接体験を「言葉」が意識化することを要求する。「からだ」と「言葉」のこの対照は、血と肉の世界と精神の世界の対照でもあり、結局は母性と父性の対照へと連なっている。ユングがすべての人間の中にその共存を見る、アニマ（女性的なるもの）とアニムス（男性的なるもの）の対照である。

だから、女性の自己実現は、女性的なるものを男性的なるものとの出会いによって乗り越えることによって最後の成就を果たす。母性はありのままの母性を乗り越えることによって真の個の確立へと連なっている。

本書の第三章までは女性の自己実現を母性への流れにおいて扱っているのに対して、最終章「個の確立」は、特に現代の女性にとって決定的な意義を持つ。

つ「個の確立」のための、女性的なるものの乗り越えの問題を考察している。その際に著者は、ユング派のノイマン女史に倣って、女性が父性を統合してゆく過程の「元型的に共通な道」として、『アモールとプシケ』のギリシャ神話を取り上げ、その神話解釈を通じてこの問題を説明してゆく。しかしこの道はなんと困難な道であることか！ 日常生活の限界の中で、女性がこの神話に象徴的に展開する局面を辿ることは至難の業であろう。各人の生活の中でどのようにこのような理念を生かしたら良いのか？ しかし逆に言えば、現実には至難の業であるからこそ、「神話」は存在していなければならない。

この神話によって展開される様々な局面に一貫した姿勢は次のようなものである。すなわち、女性が男性を真に生きようとするなら、つねにみずからの深淵に気づき、傷つき、しかも癒されつつ、徐々に男性の世界に参入してゆくという努力をすること。女性の意識化、個性化は男性と類似の成長を辿りつ

つも、つねに無意識の根底に結びついているような臍帯せいたいを保持し続けてゆくこと。その臍帯とは「愛する」能力である。「真に知性的であるためには感情が鍛えられていなければならない」。

著者はすでに第二章において、女性の存在を壺に喩えて、女性にとつてのあらゆる体験について次のように言っている。「体験は壺のなかで変容し、あるものは香り高い精神となって発酵し、またあるものは壺の底に沈み土と化してゆく」女性にとつての自己実現とはつねに、「土と化す」とことと「発酵する」とこととの良き統合であるといえるだろう。そしてそのようなものとしての女性の自己実現の辿り着く姿を、著者はユングのキリスト教観に倣いつつ、聖母マリアの中に見ている。マリアを内的に生きること。マリアの中には、キリスト教的人間観の本質と結びついた運命的な両義性が象徴されている。神の聖霊による処女懐胎は、男女の肉の結合による懐胎ではないものとして、肉の原理の否定を意味す

る。しかし同時に、肉から生まれた女性が神の母となることによって肉の原理を肯定している。霊的なものの肉なるものによる受容。マリアの中にエヴァは乗り超えられており、マリアを内的に生きることは、エロスの肉体性をロゴスの精神性に結合させることに他ならない。そのとき女性の魂は天の父を知り得る。著者はマリアの中に、「父なるもの」を内在する女性の生き方の究みを見るのである。

本書を通じての著者の姿勢には一貫して二つの要素が見られる。ひとつは、人間の深い自己というものに対する尊重と信頼。そしてもうひとつは、女性の愛する能力に対する評価。このような姿勢は、私たちが自分の自己実現を生きる為にも考える為にも大きな力を与えるものである。

(お茶の水女子大学)

# 数学の本？

国越 健司

まっ白なキャンヴァースに、最初の一笔をおろす緊張と興奮——しかし、それにもまして柔らかで、澄んでいて、限らない可能性に満ちた子供の心。それが、はじめて出会う数学の本は、いったいどんなものでしょう？ 早く百まで数えられるようになる本でもなければ、数字を覚える本でも、たし算やひき算の説明書でもありません。それは、不思議と出会う本。考える楽しさが、美しさや驚きと一つになって、胸がわくわくする本です。

子供達は、楽しい気分を受け取る名人です。そんな気分を伝えるためには、まずあなたが充分楽しんである必要があります。ご紹介するものが、実は大人の本なのは、そういうわけです。食べられるものを、最初は、かみくだいて与えるのです。同時に、それらは、あなた御自身が楽しい本を見つけるためのヒントでいっぱいです。

洋書をいくつか選びました。入手がさほど難しくなく、あまり高くもなく、絵本なので言葉の煩わし

さもなく、何よりも、きりりとした姿勢と、一生なつかしく思い出せる読後の満足感があるからです。東京で扱っている店を少しあげます。店頭にない時、注文して3か月位で届きます。洋書を扱っている店の多くは、注文を受けてくれます。

- ・紀伊国屋新宿本店 (Tel 〇三三三五四〇一三二)
- ・イエナ書店 (Tel 〇三三三七七一二九八〇)

少しでも多くの本をあげたいので、解説は控え目にします。まず、

- 1、「遊びの博物誌」
- 2、「新・遊びの博物誌」
- 3、「イメージの回廊」
- 4、「Play Puzzle」
- 5、「Play Puzzle Part 2」
- 6、「Play Puzzle Part 3」

以上、坂根巖夫著 朝日新聞社

以上、高木茂男著 平凡社

古今東西の、おもちゃ、パズル、ゲーム、遊び、本、などを紹介した、見て楽しいガイドブック。1、2の巻末に、おもちゃ等の入手先のリスト、6にパズルの集め方。多くの資料。絶好の入門書。

- 7、「なぞなぞの本」  
福音館書店編集部編 福音館書店

8、「考える練習をしよう」

M・バーンズ著 左京久代訳 晶文社

二つの全く対照的な考える楽しさあふれる本。7は、日本を含め、世界各国から集めた五二四のなぞなぞ。簡素で詩的な、香り高い一冊。8は、いかにアメリカ的な、行動的で工夫がいつぱいの、とにかく楽しい本。

- 9、The most amazing Hide-and-Seek Alphabet Book
- 10、The most amazing Hide-and-Seek Counting

Book

なかえよしを作 ポプラ社

10' R. Crowther, Kestrel Books / The Viking Press.

14' 「まほうのもり」  
村田道紀作 偕成社

11' Haunted House

15' The Magic Moving Picture Book

J. Pienkowski, William Heinemann Ltd.

Blis, Sands & Co., Dover Publications Inc.

12' ALICE'S ADVENTURES IN WONDERLAND

16' The Magic Moving Alphabet  
Moore, Dover Publications Inc.

J. Thorne, Macmillan Publishers, Ltd.

17' 「魔法使いのあいいうえお」

みんな、とびだす絵本。9は、A B C D…の文字

安野光雅・雅一郎作 童話社

のかげから、動物が出て来ます。10は、続編で、百

18' 「光の旅・かげの旅」  
アン・ジョナス著 評論社

まで数える本。この二つ程素敵な本は、他に知りま

13は、昔からある立体映画（ドラエモンにもあり

せん。同じシリーズに反対ことばの本もあります。

ました。）と同じで、赤と青のメガネで見ると、絵

11は「おぼけ屋敷」という邦訳もあり、「森の小人

がとびだして見える3-D（3次元）絵本。福音館

ノーム」と共に、日本でも親しまれています。12は

の「星の本」も同様で、星座が美しい本でした。14

「不思議の国のアリス」の、テニエルの絵にもとづ

は、赤いメガネで見ると、絵が変わる本。たしか

いた美しい本です。

「ふしぎなうみ」という続編もありました。15は、

13' 「とびだせ！ねずみくん」

九十年程前に出た本の復刻版で、細い平行線のたく

さん入った透明な板を絵にのせて少し動かすと、絵が動いて見えるモワレ効果の絵本。テレビやビデオのない時の、みごとに知恵。16は、その姉妹編で、同じ様にするとABC順にいろんな絵が動きをもつて現れるもの。17は、得体の知れない模様を、開いたページの中央に立てたアルミ箔をまいたジュース等の空き缶に写すと、正しい絵や文字が出て来る、いわゆる、ゆがみ絵または、さや絵。18は、最後まで読んだら本をさかさにして、最後から初めのページへ読み進む。同じ絵が、ひっくり返すと違う絵に見えます。

19、「母と子の影絵遊び」

一木喬著 日東書院

20、「日本の絵かきうた」

永田栄一著 音楽の友社

21、「おかしな道具のカタログ」

J・カレルマン著 パルコ出版

22、「絵本 ことばあそび」

五味太郎著 岩崎書店

23、「土屋耕一のガラクタ箱」

土屋耕一著 誠文堂新光社

19は、折り紙、あやとり等と共に、昔から伝わる身近な遊び、手影絵の本。切りぬき影絵の解説もあります。20は、〃ぼうが一本あったとき おなべかな……〃と唄いながらコックさんの絵が描ける。そんなのがいっぱい集められて、楽譜もあります。ここではあげられませんが、数多く出版されている奇術の本のおもしろさ。単純なものが、子供達には好きです。21は、ありそうもない物のカタログ。常識やぶりの発想転換の本。22は、最も身近な「ことば」で遊ぶ本。五部作の一つですが、他のもみんな冴えています。23は、さらに進んで、ことばのプロが書いた迫力あふれる「ことば」の本。ぼうしのコマリシャルを考えると、ところが特に印象的。土屋耕一さんは、全部回文、(さかさから読んでも同じにな



る文)でできた「軽い気敏な仔猫何匹いるか」(この書名も、もちろん回文)という正方形の本も著わしています。

24、「M・C・エッシャー 数学的魔術の世界」

岩成達也訳 河出書房新社

25、「はじめてであう すうがくの絵本」

安野光雅作 福音館書店

24は、超現実的なだまし絵、はめ絵、無限分割など、家元エッシャーの自選画集。25は、その名のとおり。大人も楽しめる数学絵本。

すてきな本は、まだまだあります。しかし困ったことに、あまりすてきでない本は、その何倍も氾濫しています。大きな書店を歩きまわって、楽しい発見をたくさんなさってはいかがでしょう。

小さな子どもにとって数学は遊び、身のまわりのものすべて、生活そのもの。一番大切な事は、好奇

心をもって、よく見る事と、考える楽しさを味わう事。はずむ心を伝える為に、大人は、たくさん(口では言わない)ことを知っていなければならぬ。与える何倍も読む事が欠かせません。そうでない大人達が18歳になったら誰でも自然にできる事を「教える」と称して、子供をいじめています。好奇心、自発性という、今最も大事な芽を台無しにしています。どうか「教え」ないでください。楽しんでだけでも、子供達はしあわせで、可能性の芽は大きく花開く時のために生き続けているのですから。

最後に、十代の時読んでから、今まで忘れられない二つの文章を引用させて頂きます。

第一は、惜しくも今年この世を去った今世紀最大の物理学者の一人ファインマンが、奇跡的とも思える名著「ファインマン物理学」の中で、ギボンズの言葉を引用して、

「教育というものは、教育などしないでもいいという幸福な事態でない限り、大した効果のないもの

なのである。」

第二は、芥川龍之介がその作品「酒虫」の中で、人のいいなりになって、炎天下素裸で、細引きで手足をぐるぐる巻きにされて、仰向けに寝ころんでいる男をさして、

「はなはだ、迂闊なように思われるが、普通の人間が、学校の教育などを受けるのも、実は大抵、これと同じようなことをしているのである。」

(桐朋学園大学)

津守 房江著

『育てるものの日常』

(婦人の友社)

いま、子どもと生きる日々が輝く

一章 子どもと生きる日常の中で

小さな出来事の連なり・無期限を生きる・悲しみの心にふれて・保育の冒険

・いのちのひろがり 他

二章 母親たちとの対話の中で

はじめの発見・父親の育児・きょう

だいのぶつかり合いの中で・育児に手  
おくれはない 他

## 第四十一回

## さまざまに呼び声

堀内 守

たそがれ時の呼び声

子どもが呼んでいる。にぎやかな声で、友だちの名を呼んでいる。もう薄暗くなってきた。いまさら、外へ出てこいと呼んでいるわけではないだろう。では、姿が見えなくなったから、その名の持ち主を探しているのだろうか。それにしても、呼び声に緊迫感がない。よく聞いていると、その呼び声には一定のリズムがある。呼ぶ名前の方も、三回呼んでは次の名に移るというように変化し、移っていくようである。

「一、二、三」と、声を合わせる準備をし、そのあとで、いっせいに「○○ちゃん」と叫んでいるらしい。してみると、あれはゲームなのだ。遊びがもう終わる。まもなく家に帰らなければならない。「もうごはんですよ」という決定的な呼び声の家からやってくる。そのつかの間、きょうの遊びの総決算のつもりで、仲間の名を呼び合っているのである。

かつては平凡なできごとだった。しかし、近ごろではめったにお目にかかれない光景である。それだけに、こ

の一瞬のできごとは微笑を誘った。「たそがれどき」「黄昏時」などという文字まで思い出された。

子どもたちの声はまもなく消えた。家に帰ったのであるのか。そんな思いにひたっていると、「では出かけまーす」という声がきこえてきた。家に帰るのではない。反対である。窓からのぞいてみた。二列になった子どもたちが角を曲がるところだった。珠算塾に行く子どもたちだった。夕食を早くすませて出かけて行く。

さっきの呼び声は、全員が揃ったかどうかを確かめるためだったのだ。

### 空白を充めるゲーム

「集まっているか」を確認するという実用的な目的だけならば、当番をきめておいて、メンバーの名を呼ばばいいようなものだ。だが、あの子たちは、少なくとも三回ずつは各人の名を呼んでいた。「○○ちゃん」という語尾は、「いるかい」という呼びかけであったろうし、そのほかに非実用的な意味あいももっていたのである。

ろう。つまり、あれは儀式に近かったのである。歓迎の意味をこめ、歓迎の胴上げでもするような意味あいがあった。

塾に行くにしても、集まってから並んで出かける。わずかな時間であるが、待っている時間に、たがいに黙っていることには耐えられない。何かしらおしゃべりをしているという居心地が悪い。それでああいいう遊びが考え出されたらしい。塾に行くこと、それ自体よりも、そこに集合して全員が揃うのを待っている間が楽しい。彼らにとって、黙っていることは苦痛である。沈黙していることは至難なわざである。

なぜ至難なのか。これは子どもたちにたずねてもわからないだろう。いや、成人にたずねてもわかるまい。世の常識に返し、いくら多様な答えが戻ってきたとしても、それは当座の言い逃れにすぎないだろう。一応、何か答えてはみる。ひとりが何か答えた。次の者は、まったく同じ答えを言わない。少しずつズラして答える。そのズレをたがいに認め合い、遊んでいくのである。逆

に、「右に同じ」式の答えがズラズラと連続して出てくるようなこともある。これも遊びにはかならない。

きまじめな人にとっては、こういう遊びがケンカラなことに見える。が、反対に、ポンポンと、少しずつズレた答えが出てくることに関心をもっている人には、彼らの答えのしくみが差異を競っているものと見えてくる。

### 遊びの分類

そこでもう少し踏み込んでみよう。

もう古典的な地位を占めるようになってしまったが、遊びの分類のなかではカイヨワの分類が示唆するところ大である。あまり細かく分類してもわずらわしいだけだが、カイヨワの分類は四つである。「競技」「賭け」「まね」「めまい」。

「なぜおしゃべりするのか」という問いに対し、子どもたちは一瞬とまどったであろう。そんなことをあらためて考えてみたことはなかったし、考えたところで一言で答えが出てくるはずはない。それが自分たちにもわか

っている。それにしても、こんな質問を出してくるおともなも変なものだ。しかし、何も答えないでいるのは相手の期待にそむくことになる。ならば何か答えてやろう。幸い、味方はひとりではない。それぞれが何かを答えれば、相手はそこから何かをつかんで帰るだろう。

なかばサービスの形で答えがなされる。

このとき展開するのは「競技」か、「賭け」か、「まね」か、「めまい」か。実は全部である。

最初の答えが「競技」のスタートの要因もっていることは容易にわかる。まるでナゾナゾのスタートのように。尻取り遊びの第一声のように。「賭け」の要因もある。何でもいい。当てずっぽうに何かを言えば、それが当たっていいように、当たってしまいが、次なる答えを誘発する契機にはなる。では「まね」の要因はあるか。大ありである。

「そうですね。まあ、好きだから、つてところでしょるか」と最初の者が答えたとする。「そうですね」「まあ」「つてところでしょるか」は、その場の雰囲気を反

映し、かつ新たにつくり出す。相当高度な「まね」である。

それに対し、質問者の方はどう応ずるか。それに対する期待はぞくぞくするような「めまい」の気分を与えてくれるに違いない。

このように、最初の答えは、これら四つの特性をすべて満足している。では、二番目の者はこのうちのどれかを選ぶのだろうか。あるいは四つ全部を満足させるような演技をするのだろうか。

第二の者の選択肢は相当に広いのである。

彼はまず、真に心の中で考えていることを口にすることもできる。あるいは、相手の期待を推察し、期待にそむかぬような答えを選択することもできる。この場合は、相手の期待にそむくような答えだって可能なのだ。

真に心の中で考えていること、など、そうざらにあるものではない。もし、あったとしても、それを会ったばかりの人に軽々しく口にするのも変なものである。そこで真に心の中で考えていることから自由になり、別種の

答えを口にする。もうそのあたりで、「競技」の次元が顔を出す。「賭け」の要素も顔をのぞかせている。

また、彼は、最初に答えた友人の答えを無視することはできない。あの答えを全面否定するような形では答えられない。したがって、選択は、「近接」している答えか、「類似」の答えかの可能性が大である。「まあ、同じです」か、「楽しいから」というようなのがその例である。

#### 質問者の対応

質問者にはこやかに質問を続ける。答えを記述したり、「それはどういうことですか」と再質問する余地を残しながら。

ただ、質問者の方は、あらかじめ、何のためにこのアンケートなりインタビューなりをするのか心得ているから、見かけ上の答えと、二次的、三次的な解釈とをちゃんと区分しているはずである。

だから、ひとつひとつの答えに、こやかに応じなが

ら、冷静にひとつひとつを再解釈しているはずである。

「楽しいから」とか「面白いから」というレベルで満足していくものだろうか。どういう場面でも、どういう表情で、どういう声の調子で、というようなことも全部判断の材料にしなければならないのだ。

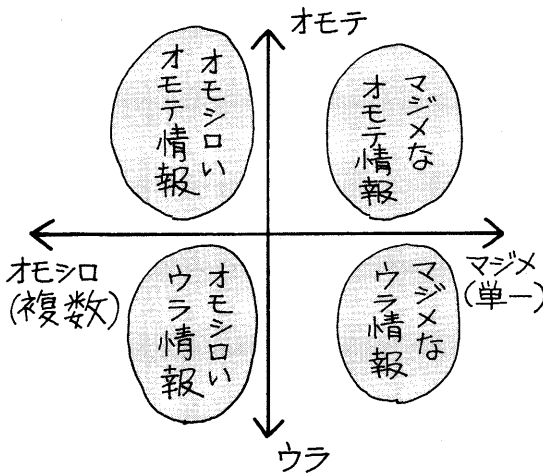
これは何を示しているかという点、たぶん「答えはこ  
とば通りに信じてはならない」という原則の存在を示  
している。応答者は、アンケート慣れしているから、暗黙  
のうちに質問者に迎合したり、いっしょにいる仲間たち  
に迎合したりする。だから、一つの答えは、確かな根拠  
に基づいてなされるということはあまりない。むしろ、  
根拠はその場で突然考え出されたり、答えてしまったあ  
とで、削り出されたりするし、次々と答えがなされていく  
につれてしばしば修正されたりするのである。

これが実状である。

だから、質問者の方は、答える人たちにたえずフィ  
ドバックをする。再質問したり、表情を読んだり。その  
とき、彼は、頭の中に下のような分類表をもって対応し

ている。

「オモテ」——「ウラ」という軸は、情報の許容度を  
示す軸である。「オモテ」で通用する情報は、無難で、





一般的な表現になる。これに対し、「ウラ」の方は、「こ  
こだけの話だが……」というように、通用する範囲が限  
られる。しかし、具体的な流通路をもち、効果も大き  
い。

「マジメ」と「オモシロ」という軸は、文脈が単一  
か、それとも文脈がいくつもありうるかという可能性の  
軸である。

以上を組み合わせてみると、四通りのタイプが得られ  
る。

あるていど時間をかけていると、この四つが活気づい  
てくる。つまり、答える方の人たちと、より親しくなっ  
て、このいずれかのところに分類できるような条件がで  
きてくるのである。したがって、いかにもアンケートら  
しく見えた最初の質問のいくつかは、こうした雰囲気をつ  
くり出すための準備にすぎなかったというようなこと  
もある。

まったく手の混んだカケヒキが必要になってきたもの  
である。

### 真贋のあいだ

加えて、別の面から問題が照射されるようになってき  
た。

新しい真贋論争である。それはまず「真」の意味がお  
かしくなることから始まった。

私たちの素朴な信念では、「ホンモノ」と「ニセモ  
ノ」という分類は明々白々のものと思われている。そし  
て「ホンモノ」の方に価値があり、「ニセモノ」の方に  
は価値がないという信念も共有されている。美術品など  
の作品を思い浮かべていただくときよいだろう。

長い間、私たちはそういう見方に慣れてきた。しか  
し、少していねいにまわりを見まわすと、「ホンモノ」  
の複製がやたらに生まわっているのに気づかせられる。  
写真、テープ、ビデオ。これらのほかにもっと手の混ん  
できた装置もある。演奏会に行つて演奏を聴くのもひと  
つのホンモノに接するしかたであるが、最近では一枚の  
ディスクから何通りもの演奏を加工できる装置まで出現

し、ナマのナマたるゆえんも修正されはじめている。

元の形、つまり「元型」<sup>オリジナル</sup>に対して、「複製」<sup>コピー</sup>の方が従であったのが、いつのまにか「元型」のない「複製」だけのモノがはびこりはじめたのである。

「元型」が主で、「複製」が従であった時代から見たら、いかがわしい世の中になったわけであるが、そのあたりで目くじらを立てていると、ことの本質を見失なってしまう。

「写真」という文字は「真」を「写」すと書く。その文字には、「元型」がまずあって、「複製」ができるという信念が息づいているように思われる。だが、人物写真を例にとってみればわかるように、「写真」は「真」を写しはしない。化粧し、服装をあらため、あらたまった表情をし、ライトである方向から光を当て、というようにして写され、修正されたりもする。

広告、案内、チラシ、書物、その他もろもろの媒体に載せられている写真は、私たちの眼を肥やし、目利きにさせてくれる。美術全集の中に収められている元の作品

を私たちはいくつ直かに見ているだろうか。

明らかに複製を通してである。

「元型」と「複製」という二項の対照だけで結論を出すのがおかしくなってきたのである。

ルソーとフランクリン

ルソーは『告白』を書いた。自己をありのままにさらけ出すことを大胆に宣言して。

彼の場合、人間の本来の姿（元型）は、「自然人」である。とうの昔に失なわれた人間像である。「起源」<sup>オリジン</sup>好きのルソーは、「起源」の人間という「元型」<sup>オリジナル</sup>の側から「現代人」を裁く。それはまるで、複製だけの世界にひとり迷い込んでできた元型のとまどいの表白のように映る。

読書者たる私たちには、ルソーのきまじめな純粹さは二様に見える。「なんて誠実で、神経の過敏な人だろう」。「しかし、彼を友人にしたらつき合い切れないな」。

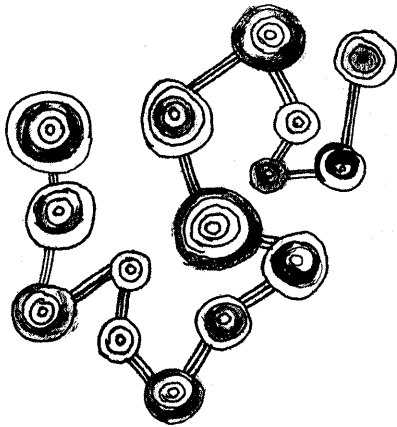
ルソーの書は「悲劇」の構造をなしている。甘えもある。苛々もある。

最大の問題は、ルソーが「元型」にこだわって、ウジウジしたメッセージで呼びかけてくる点だ。

対照的なのが、同時代のアメリカのフランクリンの『自伝』である。こちらの方は最初からウジウジしていない。「元型」だの、「複製」だのという二項対立は乗り越えてしまっている。彼にとっては、「誠実」さとは「元型」と「複製」の照合の問題ではなく、たえず「複

製」をつくり出していくことだ。コピーこそオリジナルをつくるのだと明言しているように見える。「誠実さ」は、いまのいまと未来へ向けて自分をつぎつぎとつくり変えていく過程にはかならない。だから、彼の自伝からは、「元型」から切り離され、身軽になっていく欲びが伝わってくる。

元型が複製をつくる。それゆえ、複製は次の段階では元型になる。こういう連なりを考えてみよう。すると、すべてがコピーからコピーへと連なっていくように見え



てくる。生命とはそういうものではないか。子どもとはそういうものだ。元型が複製に転じ、複製が次の元型になるように、子どもはやがておとなになり、親になっていく。そういう連鎖を考えるならば、人間の存在を「悲劇」に見たてるとは正しいか。いや、その「悲劇」さえ、コピーなのではないか。フランクリンのメッセージは、ルソーをこう批判しているように響く。

気のせいか、「ジャン・ジャック・ルソー」といういかにもきまじめな名前と、「ベンジャミン（安息香）」という名の「ベンジャミン・フランクリン」の軽薄な名前とが対照的にも思えてくる。余分なことだろうか。

これらのメッセージはふだん隠れている。しかし、あのインタビューないしアンケートの方法をベースにし、記号論的な分析をここに加えてみると、彼らの呼び声は右のように響いてくる。

「悲劇」のコピーを自分でつくり、それをシナリオとしたルソーは「悲劇的な人」を演じた。だから、フランクリンよりも名が響いたのであろう。フランクリンのよ

うに、どこまでがホンネなのかわからないくらいコピーをつくり出すことに快活だった人物は、非「悲劇」的な生活を送った。別のいい方をする、俗物に近く見えるわけである。

#### 呼び合う声

それにしても、なぜ人と人は呼び合うのであろうか。この平凡とも見えることを、かなり回り道をして考えてくると、ルソーがしきりに送っている深度のメッセージがきこえてくる。

「私は自然人という元型を純粹に考え過ぎてしまった。人が生活しているという日常は、人が人を呼び、自分の充足できない不仕合わせの部分を補ってもらおうということであつたのに、そのことをきつく非難し過ぎてしまった」というような。

この「不仕合わせの部分」なるものは、実は底のないような空白をなしているのであろう。ルソーは、その空白がこわかった。

フランクリンは「不仕合わせな部分」を見つめるよりは外向的であった。彼はいつも人のまんに脚光を浴びていることを選んだ。そうしていれば、その空白を何かで沸き立たせていることができたからである。

ルソーは「純粹」を選びとって神経が疲れ、フランクリンは「舞台」を選びとって、神経が疲れた。

珠算塾から子どもたちが帰ってきた。

後日、長時間にわたるインタビューを試みた。外からは何とでも評価できる。「遊ぶ時間がなくてかわいそう」(これはルソー式)とか「どんどんやれ、腕に技をつけておけ」(これはフランクリン型)。

結果は全然違っていた。

むしろ彼らは珠算塾の往還を楽しみ、塾の教室でのやりとりを楽しんでいる。それは、塾にはあの「競技」「賭け」「まね」「めまい」が生きているからであった。

彼らの話をきき終えたあと、もういちどルソーとフランクリンを読み直してみた。

ルソーの得意技は、時計の修理と、曲を聴いて譜面に

書き直すことであった。フランクリンは、ありとあらゆるジョップをこなした。ローソクづくりから新聞づくり、最後には外交のしごとまでやった。

彼らの呼び声が変わって響いてきた。

親に教えられ、兄弟に教えられ、先生に教えられ、友だちに教えられる。書物から、町からも教えられる。空からも海からも。

教えられないで教えられることもある。

けれども、

自分が自分に教えるという経験がいちばん大変である。無数にあり、わけのわからぬことではない。経験。

その自分を知るためには、

考えてばかりいてもだめである。

手を使ってみたり、歩いてみたりしなくてはならない。子どもの声に耳を傾けてみなければならぬ……。

(名古屋大学)

子どもと(6)

九月・外へ

清水 光子

まだ残暑が厳しく寝苦しい夜があけた九月の初めの朝、驚く。空の青さに。そして樹々の影、ビルの形をうつした影が何とくつきりとしているのに！

「秋が来た。晴れた日、澄んだ空気、木の実草の実の豊熟、及び我等と子どもとの健康をもってよき秋が来た。」と倉橋惣三先生は園丁雑感の「秋が来た」の冒頭に言っておられる。そして「ある朝の急に引きしまった爽かさに、夏の子のゆるんだところが蘇る。どんなよりとうたた寝でもしていたような健康が、むくむくと目醒めて来る。全身の筋肉がすこやかなる緊張を増し加えて、行くに広き野、攀ずるに高き山をもとめて来る。(中略)畢竟、秋は戸外の季である。さらに、おのが健康をして自ら戸外に味わい楽しむべき季

節である。」と。その初秋九月である。

わくわくと胸躍らせて新学期を迎える保育者の、期待にみちた思いは久し振りに逢うあの子、この子の顔、表情、姿、うごき、声のどんなになったか、にある。そして、始まる新学期、「おはよう」と飛び込んで来て、「ねえ、ねえ」と話したい事が一ぱいの子、「私の顔黒い?」「ええ、とても黒い!」「ぼく、大きくなったでしょ?」とうれしげに保育者と背くらべをする子があると思うと、休み中何かあって浮かない顔があったりもする。成長の喜びは保育者、親はもとより、子ども自身大きく深い感動である。ただ、私はまたしても表に表われた姿をみて成長とすぐに喜んでよいのかどうかを疑うことがある。

四月に入園した四歳児のA君は、お母さんから離れ難くもなく、ごく静かな存在であって問題らしいこともなかったが、担任は何かもう一つ気がかりだった。自信なげで、砂場で遊んでいて使っているシャベルを友だちに持って行かれても黙っており、砂遊びをやめてしまったりする。そのA君が、九月になったら急に、目がさめてエンジンがかかったように、朝登園するなり砂場へ突進、はだしになって、何と、「オイ!」などと友達を誘っている。ほんとによかったなと嬉しく、見守っていいこうと思う。が、一方H子はお休みに入ると間もなく弟が誕生したので、数十キロ離れた祖父母の家(田園地帯)で過ごし、九月に入るまぎわに父母の許に帰って来た。そのことは夏休み前から保育者もきかされていたし、便りには「元気で、自然の中で伸び伸びと遊んでいます。」と知らされていたのだが、新学期になったら、一学期にあんなにおりこうで、物わかりがよかったのに急にひど



く甘えん坊になり、友だちにいじわるをすることがある。ああ、やっばり!と思い、ここは暖かく気長に見守るしかない、甘えは或る程度受け入れて、日子がさぞ心で戦っているだろう壁を乗り越えるのに、精一杯力を貸さねば、と思うのである。九月はこうして一日、日が短かくなって秋分の日になる。秋祭りがあり、運動会がある。敬老の日にはお年よりを慰める行事がある。そわそわと、ざわざわと行事に追われて、親も、保育者も子どもをまき込んであわただしく過ごしてしまわないようにと、いつも思うのだが、自然はそんなとき、ハッと足許をみつめないではすまされない試練をしてよこすようである。九月に日本に多い台風の襲来がそれ。子ども達はいつも歩き慣れている道の街路樹が無残になぎ倒され、まだ黄葉の時期でもないのに広葉樹の葉がむしり取られている、嵐の収まった朝、雨風のすさまじい音に母にすがりつき、おびえおのいた昨夜だったのが、朝あけてみれば空は青く澄みわたって高い。子ども心に何とも大いなるものの力に畏敬のようなものを感じたことであった。

四月から転入園した五歳のY子ちゃんは相変わらずことばが少い。保育者のことばかけにも必要以上の答えはない。欲しい物も、これと言うだけなので、できるだけことばを引き出して話すようにしむけるのだが、なかなか思うようにいかない。かと言って幼稚園に來たがらないのではなく、運動会にと考えている遊戯のレコードが鳴り、保育者が数人の子ども達と輪を作っておどり始めると、ごくすらりと輪にはいっておどり、友だちと手をつないで、目を見交している。これでいいのか? と思い、とにかくあせらずに保育者が

つねに近くにいるように、と心掛けていた九月の或る日、ジャングルジムがたまたま誰もいなかった。そこにY子が独りで登って、てっぺんに腰掛けて空をみているではないか！私はと胸を打たれた気がして、ゆっくりとジャングルジムに登り、黙ってY子の傍に腰かけた。二人ともただそうして、どの位の時間か、多分二〜三分だったろう。「先生、あの雲、兎さんみたい！」と指さしたのは、ふわりと浮かんだ白い雲だった。青い青い空にまっ白な、「あら、ほんと！」兎みたいな雲が浮かんでごくゆったりと動いている。彼女の目が私の目を捉えて笑っているのをみて、我が目のうるみを恥じたことであった。高鬼の男の子達が馳け登ってくるのを機に二人は降りて、何となく手をつないで保育室に入ったのである。そんなことがあってから、時々肩や背をたたかれて、みるとY子ちゃん的笑顔があつて、それも友だちと一緒にあつて、私はひそやかな安堵感で充たされたことである。

古い手紙を整理していたら、後輩から、二学期の準備に登園している様子を知らせて来ているのがみつかった。「園庭は雑草で一ぱいです！まるでジャングルみたい。夏休み前にほんのポツポツだった草がまあ、よくもこう繁ったものだと感じました。でも、私たち、草取りはしません。子ども達を迎える最高の贈り物なんですもの。」私はあらためて彼女達、その園の先生達の子どもへの心を感心し、倉橋惣三先生の「夏休み後」の文章を思い出した。まさにびったりだ、と。ガッパ見付けた草の中……。の倉橋先生作の童謡

がつい口に出てしまった。

しづかなる 力満ちゆき ぼった飛ぶ

加藤楸邨

それにしても、今は都会ばかりでなく地方でもこのような原っぱがなくなってしまつて、きれいに整えられた芝生（ならまだしも）アスファルトの庭の片隅に花だん、というのが一般、普通なのではないかと悲しい。「緑をふやそう、身近な自然を大切に。」と叫びながら、道路整備や宅地開発造成などで緑を失くしている矛盾だらけな環境整備。

九月、秋分の日が過ぎると目に見えて日照時間が少くなる。秋の日はつるべ落としという。夕焼が美しいとみる間に星が（見えることが少くなったとはいえ）輝き出す。自然は春、夏と生きとしいけるものの成長発展に懸命になり、今、秋、充実の秋がはじまっている。栗のいがは日に日に大きく色づきはじめる。梨やぶどうが実り、ふくらむ。嵐のあと雑木林にまだ青いドングリがころがっていたりする。そして涼しくなったな、と思つた宵、軒下からこおろぎの音がきかれて、まあ、よく生き残ってくれたものよとありがたくなる。

こおろぎの この一徹の貌を見よ

山口青邨

私達の子ども達は、この充実の秋を自然の一員として楽しむわけなのだ。手製のおみこしを大ぜいでかついで、祭はやしの音楽をバックに運動会の演しものにするなんて、ほんとおもしろく、うれしい。鎮守の森のほの暗い中での、夜店を照らすガス燈の匂いのなつかしさ、など昔々のことであるが、今の子どもたちにも、素朴な人間のうぶな、どこか暖かく、しかも生命力に満ちた何かを、少しでも残しておきたいと思ってしまう。お月見というのも通り一遍の行事でなく、科学をふりまわさないロマンティックに楽しめないものか、これは家庭でこそやってほしい行事だと思ふのだが。

月天心 貧しき町を 通りけり

与謝蕪村

ほどなくとも、である。

子ども達と蒔き、育て、夏中次々咲かせた朝顔の花もめっきり小さくなった。

朝顔の 紺のかなたの 月日かな

石田波郷

青という色は天上的な色で、限りなく人の心を非日常の世界へ誘う力をもつ。と詩人大岡信氏のこの句の解説にある。空の青さにも通じるような気がする。

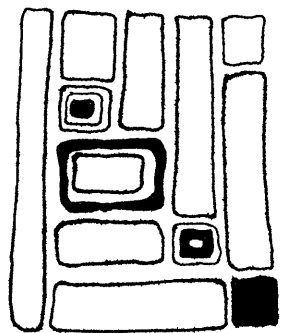
斯くしつ 遊び飲みこそ 草木すら 春は生いつ 秋は散りゆく 大伴坂上郎女

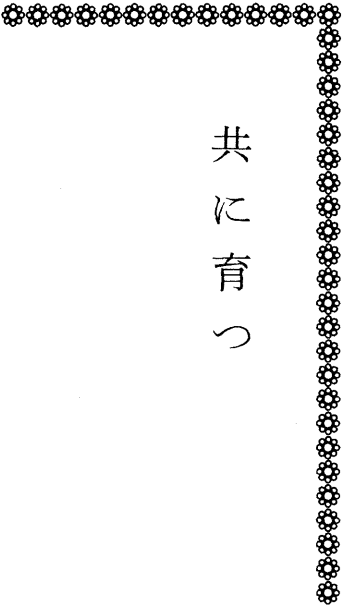
萬葉の頃と二十一世紀間近な今と、人の心の自然との関わりにどんな違いがあるだろうかとしみじみ訝しむ。

天つ星 路も宿りも ありながら 空に浮きても 思ほゆるかな 菅原道真

千年前の科学的でもあった知識人が、何と無邪気な感じ方をしたのか、ほほえましくなる。ともあれ、子ども達と日々、秋を楽しむことに精を出そう！

(音羽幼稚園)





## 共に育つ

A君が笑顔で走ってくるのが見えました。「今日も御機嫌がいいわ」「A君おはようございます」しっかりと目と目を合わせて朝の挨拶をする、「おはようございます」「ちょっと甘えたA君の表情がとても可愛い。A君は難聴児なのです。」

補聴器をつけているのですが、真うしろや真横からの声は聞きとれません。唇の動きで対話をするのです。

十月のある日「障害のある子供でも入園させてください



## 稲岡 康好

いますか。」当園に来られたお母さんの両側には、補聴器をつけた兄と妹が立っていました。生まれつきの病気のために、二人とも強度の聴覚障害児なのです。しかし、そのお母さんの態度には少しも不安気な様子はなく、むしろゆったりとした落ち着きさえ感じられました。

五歳児とはいっても、入園当初の子供たちの遊びは何

となくぎごちなく、大型積木で遊んでいる姿も個々で好きなものを作っています。家らしき囲いを作って出たり入ったりしている子、トンネルを作ってくぐるのを楽しんでいる子、仲良しのいる子はままごとをしているようです。A君は囲いに工夫して板を組み合わせてドアを作っています。その板を左に押すと開くのです。自分がその横に座ってドアマンよろしく開けたり閉めたりしています。友達が勝手に入ろうとすると「……」何か言っています、でも相手に伝わらないのです。他の子供たちも不思議そうに見ています。そのうち「この積木のドアをトントンとノックして」と言っていることが教師に分かりました。教師がトントンとたたくとA君はにこにこ顔で開けてくれました。A君のお家に友達がたくさん遊びに来てくれました。

大型積木を床へ置く時の音が聞こえないA君はお片付けの時、元氣よく大きな音で床に置くのです。クラスの友達は、「ワーうるさい」と言って両手で耳を押さえます。

す。扱い方も乱暴なので「危険だよ。」と教えるのですがよく分からないようです。教師は対話の手段として手真似をしました。少し分かったようです。

降園時にA君のお母さんと話しました。

〔前略〕手っとり早い伝達の方法で、相手からも又、自分からも心が通じてしまうとすれば、どうしても簡単な方法に傾いてしまうのは自然の成りゆきでしょう。

(中略)

Aが分かるうとして聞く態度が出来ていて、しかも一生懸命こちらを見ていてお互いの目が合った時、それがチャンスです。視線をそらさずに何度か言う、あるいは一回でも分かれます。

ある先生は難聴児を一人育てると言うことは、六人の健常児を育てる程の間がかかる、と言われました。その世話は私が見ますから、先生方はどうぞ他の子と同じように見守ってやって下さい。(中略) Aに関しては私が一番のプロです。いつでも何でもお尋ねください、精一杯お答え出来ると思います。」

お母さんはこうおっしゃいました。

A君が園庭で友達と遊んでいます。タイヤを一列に並べてその上を走っているのです。最後のタイヤを走り終えた時、A君が右に、左にと大きく手を振っています。

「何をしているのかしら」暫く見ていて分かりました。

「男の子は右へ行け、女の子は左へ行け」と言っているのです。しかし不明瞭な発声と発音で子供たちは分かっていないのです。好き勝手な方向へ廻って後ろについて又タイヤの上を走っています。A君は木切れを拾ってき、右側へ「おとこ」左側へ「おんな」と書きました。字の読める子が通訳をしてその場は成功。

A君と同じマンションのS君。生まれた時から一緒に育った仲良しです。A君の良き理解者。

ゲーム遊びで二人組になる時、視線はA君に向けられています。A君が早く二人組になったのを見て、自分も友達をみつけます。A君がなかなか相手をみつけれな

い時、サッと手をつなぎに行きます。

園外保育に行くバスの中、A君はマイクを持って歌いました。でも私達には分かりません。手拍子を打ってここにこしているのですが、メロディも詞も分からないのです。突然S君が大きな声で「こぎつねコンコン山の中……」と合わせました。二度目はバスの中で大合唱になりました。

A君の園での生活を知っていただくために交換ノートを作るよう、担任に申しました。

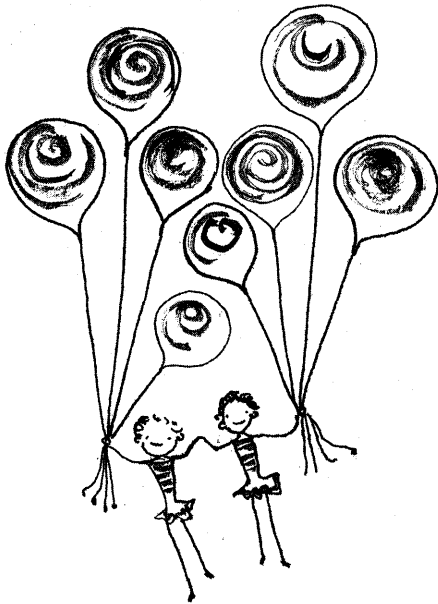
お母さんから先生へ

「難聴と言う事」

「簡単に言う」と聞こえにくい事です。でも補聴器（以下はHA）をつけて、ちょっと呼んでも聞こえないA君を見てみると、きつと名前を呼ぶ大きな声も聞こえない、と友達は判断すると思いますが、どうしてどうして、オルゴールの音だって聞こえるんです。



我が子が難聴と分かった日から、親の我が子への口数がぐっと減るそうです。聞こえないなら話しかけても無駄、ついついそう思ってしまうのではありませんね。聞こえにくくても、HAをつけているのに。親は突然何を話しかけたら良いのか、どういう風に話しかけたら良いのか分からなくなってしまうのです。子供にはHAをつける前も後も全く同じ、かわいいままですのに



……、もちろん「言葉は耳を通して伝わってくるものです。けれども言葉を介して伝えようとする心は直接心に響くはずです」ほとんど聞こえない幼子を胸にしっかり抱いて散歩します。花を見ては「きれいなね」鳩を指しては「ポッポがいるね」とか言いながら歩きます。(中略)

難聴児といっても、聴覚以外は普通の子供と同じ、

何でも出来ないはずはない。と頑張ってきました。それでも耳からの情報が他の子供たちよりも少ない分だけ色々遅れはあると思います。けれども何にでも興味がありますので、どんなむずかしいことでも言ってみてやっってください。これは無理かな、と思う事でも案外すつと分かる事もあるようです。(以下略)〃

先生よりお母さんへ

〃お花が笑った〃の歌をうたいました。A君の得意な歌なんです。それは大きな声で歌ってくれます。二回、三回、とうたっているうちに『もつと知ってるよ』と言わんばかりに、『コチコチカッチン』と時計の歌をうたい出すのです。この歌もとてもお気に入りです。でも「お花が笑った」の歌と一緒にうたわず、一生懸命に別の歌をうたっている彼に苦笑しました。〃

このようにして毎日、担任とお母さんとの交換ノート

は続きました。

一学期はとまどいの日々でした。A君が話しかけてくれるのに私達は分かりません。三度まで聞き返しますが四度もう聞き返すことが出来ないのです。A君の懸命な姿に胸が一杯になり曖昧な笑顔で分かったように首をふってしまいます。

お母さんにその事を話しました。「先生、今後はそのような事はしないでください。先生がお分かりになるまで、四度でも五度でも聞き返してやっってください。今日、分からなければ又明日教えてね、と言ってやっってください。Aは分かってもらえるように努力します。Aは強い子なのです。私はそのように育てて来ました。」そうきっぱりおっしゃったのです。

二学期のある日、自由あそびの時、あじさい組の子供がリレーをしています。「がんばれ」応援も元気です。

A君とM君が走っています。M君はクラス一番の腕白坊

主なのです。何でも一番でないと我慢が出来ないので。まっ赤な顔で走っています。A君が勝ちました。「ワーA君走るのが早いなあ」M君が地面にひっくり返って、青空を見上げて叫んでいます。とても嬉しそうな顔で。

先生からお母さんへ

「今日はゲーム遊びをしています。フルーツバスケットです。鬼になった子が円の真中に立って「いちご」とか「メロン」とかフルーツの名前を言うと円周に座っている子は大急ぎで他の椅子に移るゲームです。椅子とりゲームなのです。鬼がA君に背中を向けていたらA君は全然分かりません。K君が「鬼はA君の方を向いて言ってやれよ」と注意してくれました。」

お母さんより先生へ

（前略）健常児と共に生活をして、一緒に学校へ行つて、普通の社会人になってほしい、と思っています。

私はこの子をそう思って育ててきました。当面の目標はだれが聞いても分かるように話せる事ですが、本当の目標はちゃんと自立した普通の考え方の出来る社会人になることです。「生きる」と言うことの本当の意味の考えられる人間になることです。あるいは、なろうと努力することです。（以下略）

心身障害児を考える時、早期発見、早期教育と共に、集団の持つ教育力は大きいと思います。健常児との統合教育の中で、その子から学んだり、又、そのお母さんから学ぶことが多くあります。毎年何等かの障害のある子供と共に過ごしながら、貴重な経験をさせていただいています。この経験を今後の統合教育に生かしていくと共に、私の生きる指針にしていきたいと思えます。

（神戸市立大池幼稚園）



者はたまりません。先日もごはんの時間がいつもよりちょっと遅れたところ、「計画が狂った。今ごろから食べたら勉強が間にあわない。どうしてくれる」とわめき出し、何とかなだめて食べさせようとすると、「こんなもの食えるか」とお皿をひっくり返してしまいました。そしてその翌日、今度は自分の頭髮がどういうわけかこのごろ天然パーマになってきたのを気にして、「元のようなまっすぐな髪に今すぐ直せ」と大騒ぎをし、「そんなこと出来るわけないでしょう」と無理難題を取りあわなんでいると、「お前がこんな髪の毛に生んでおいて、責任もとらずに何だ!!」といきなりお母さんになぐりかかったのです。こんな時逃げようとしたり、涙を流したりするとそれにまた刺激されて、乱暴は募るだけなので、お母さんも家族の者もじっと彼の怒りが収まるのを待つ以外に方法がみあたらないということです。

• 学校では従順で大人しい優等生

不思議な事に、彼はその前日どんなに荒れて家族の者

に被害を与えても、朝になると何事もなかったかのような顔をして学校へ行くのです。しかし自分から仕度をしてということはなく、起きる事から始めてすべてがお母さんまかせの状態です。お母さんはまるで王様にかしづく下僕のように一郎君に仕える毎日ですが、それらも、虫のいどころが悪いと、いつ怒りが爆発するかもわからず戦々きょうくとしています。門の所で見送るお母さんに、彼は何度も後を振り返りつつ登校するのですが、角を曲るとそこから先は別人のように顔の表情が変わり普通の中学生の顔になるようです。担任の先生に家での様子をお話ししても、とても信じられないとのこと。中学に入ってから今まで三人の先生に担任されましたが、どの先生も彼をほめることはあっても、家での乱暴狼藉は想像も出来ないと言うので、お母さんは我が子ながら彼をどう理解したらよいのかわかると悩んでしまいました。

• ききわけのよい手のかからない子だった

一郎君の両親はたいへん物静かなやさしい人たちで、今まで子どもに手をあげたり、声を荒げて叱ったりした事は一度もないとのことでした。彼が幼い頃、多少いたずらをするがあつても、言葉でやさしく言つてきかせるとわかる子だったので、その必要がなかったといひます。近ごろよく言われる、いわゆる三歳頃の第一反抗期のない、ききわけのよい子の典型だったようです。ですから中学生になつて些細な刺激でイライラし、形相を変えて迫ってくる彼は、気が狂つてしまつたのではないかと心配でたまりません。

・喜怒哀楽の感情を育てる

ききわけのよい、物静かな子、それは親にとつて手のかからない育てやすい子かもしれませんが、本来、子どもは自分の喜怒哀楽の感情を素直に表現してこそ子どもらしいといえます。しかし近頃相談室にいて気になることの一つに、こうした感情がきちんと分化して発達してないのではないかと思われる子どもに時々出会うこと

です。自分が今うれいいのか、悲しいのか、怒っているのか、楽しいのかわからない子どもたち。「どう思う？」とたずねても「べつにいい」と投げやりな返事しかもたない子どもたち。

人間は三か月で快・不快の感情が生じ、六か月で怒り・嫌悪・恐れが、一歳で愛情が芽生える（ブリッジ）と言われていますが、こうした感情は本能として自然発生してくるものではなく、家族や友だちといった人間関係の中で学習し、次第に身につけていくものだということを強く感じさせられています。

一郎君の家庭でいうならば、不快な感情を育て、それをコントロールする力を学習する機会の少ない家族だったように思われます。さらにストーが指摘したように、人間の攻撃心は、向上心・知識欲の原動でもあるとの見方をすれば、まさに一郎君は受験という困難にぶつかつて、攻撃心のマイナスの面がようやく解<sub>き</sub>発<sub>せ</sub>された段階（生後六か月）で、プラスの面の発達はまだまだ先の事かもしれません。

## 事例2 トラブルメーカーの終息

小学校四年の二郎君は、小さい時から奇想天外ないたずらが絶えず、両親は片時も気が抜けません。たとえば彼が幼稚園の時、自宅の塀ぎわに止めてあった車が、足場にちょうどよいと、ボンネットから屋根に登って塀に乗り、どの位遠くまで飛べるか競争をして車をへこませてしまったり、小学校に入ってマッチが使えるようになってとうれしさと面白さから「マッチ、マッチ」とマッチの虜になった時がありました。お母さんに見つかるマッパチを取りあげられるので、彼としては隠れてやったつもりが、押入れであわや火事にと大騒ぎになったり、彼がハイハイを始めてからというもの、いつも目が放せない気持でずっと今日までできてしまいました。

### • 心配が口やかましさに

こんな二郎君ですから、両親は彼が何かをしようとするときまだ何もしないうちに「気をつけてね」「人に迷惑

をかけないようにね」という注意がつい口から出てしまうということですよ。

このごろの彼はこうした両親の目がわずらわしく、日々監視されているような気がして気持よくありません。この間も学校の工作の宿題でカッターを使っていたところ、勢いが余って机に傷をつけてしまいました。自分でも内心「しまった。どうしよう」と思っていた所へお母さんの一言がとんできたのが火に油を注ぐ結果となったようです。この時の彼はいつになくはっきりした声で、「わざとやったんじゃない。お母さんはどうして僕のことを一々見ているのか言うの。そんなに見ているから失敗しなくてもいいのに失敗しちゃうんだ」と抗議を始め、いきなり手にしていたカッターで襖をズタズタに切ってしまいました。

事ここに及んでお母さんは、もうこの子は私の手に負えない」と相談する気になったようでした。

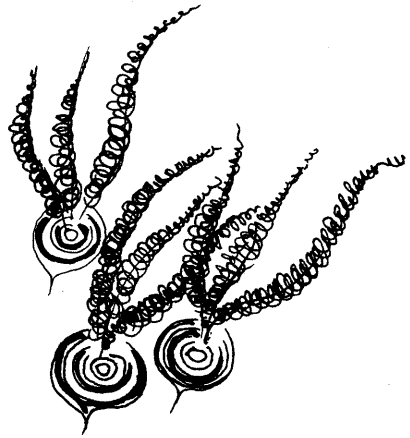
• 騙さなくても真実は見抜かれている

知能テストをするとの理由で連れて来られた二郎君は、いきなり玩具がいっぱいある遊戯室という所へ案内されてびっくりしたようでした。そんないきさつを知らない担当者は初めての出会いでもあることから、彼を自由に遊ばせて、様子を見る（観察）つもりでいたのですが、時間の半分以上を過ぎる頃から彼が妙にソワソワと始めました。何事かと思つて、「どうしたの？」とたずねると待つていたかのように「ねえ知能テストしないの？」というのです。驚いた担当者が「どうして？」と聞いて初めて彼の来談の目的がわかったのですが、「やつてほしい？」と聞くと「ううん」と否定するのです。「それともやらないと後でお母さんに叱られるかな」と言う、「うん」とのこと。そこで「ここは遊びに来る人がいやがる事はしないよ。お母さんが何か言ったら、私がお母さんに言ってあげる」とまず彼を安心させることだと思ひました。この日は知能テストといわれてひどく緊張して来談したであろうのに、実にアイデアに富んだ遊びを工夫する彼に感心していた事を伝えると、彼の

顔がパツと輝いたのです。「だから私は知能テストをする必要はないと思う」ということを彼に伝える一方、「でもお母さんはどうして君をここへ連れて来たんだらう」と尋ねると、「それは僕があんまりお母さんの言うこときかないからじゃない？」とのこと。この一言を聞いて、私はまたぐどんなに幼い子供でもその子なりに自分をとりまいてる世界の本質を見抜いている」というある精神科医の言葉を思い出しました。ですから彼のお母さんも知能テストなどと嘘をつかず、お母さんとして困っていることを単刀直入に伝える方法もあつたかと思われまます。

・自分を受け入れ理解してくれる人の言うことはきく  
二郎君は相談室がたいへん気に入るその後10回ほど通つてきたのですが、一緒に遊ぶうちに、あまり突飛な行動をしなくなりました。はじめのうちには既成概念にとらわれない柔軟な発想が出来る子と、担当者は多少買ひ被つていたようですが、落ち着きが出てくるようになって





て、「こんなことをしたらお母さんはどの位騒ぎ立てるだろうか」といった大人をためす気持が、無意識のうちには作動していたようにも思われました。

一方お母さんは、ただ遊びに来ているだけなのに彼が変化していくことが不思議でなりませんでした。何とか彼の口からどうしてそんなに相談室が好きなのか聞き出そうとするのですが、彼の返事は今一つはつきりしません。

ところがある日、彼が小さい時から大好きな母親の妹が遊びに来た時、彼が思わず言った一言、「相談室の先生、おばちゃんに似ているんだよ」を聞いてハッと思い当たったといいます。というのは彼がやたらと火遊びをして困った時、親がいくら注意しても効果がなかったのに、このおばちゃんが彼に火事の恐ろしさをゼスチュアたっぷりと言いきかせたところ、その後マッチを持ち出さなくなったことを思い出したのです。その時は今ほど

はっきりおばちゃん功績とは意識できませんでしたが、この彼の一言で何もかも納得できたとのことでした。そこでお母さんは、彼が小さい時からの自分と妹の違いを比較してみると不思議なことに自分の言うことはなかなかきかないのに、妹の言うことは聞き入れていることがたくさん出てきて、お母さんにはいささかショックなことでした。そして自分と妹の一番の違いは自分を常識の枠からはみ出た困った子と思っているのに対して、妹は発想が自由で面白い子として肯定的に見ていることだと気づいたのです。

こうして二郎君のお母さんは、子供というものは自分を認めてくれている人の言うことはきくものなんだというのを学んだといつて相談を卒業していきました。

### 事例三 母親への乱暴は父親ゆずり

太郎君のお父さんは彼が小学校一年生の頃から家をおけるようになり、このごろでは月に一回お母さんからお金を奪いに帰ってくるだけの生活です。家族の生活費を

くれるどころか逆に浮気に注ぎ込むお金など渡す必要がないとお母さんは思っているのですが、アパートの現金収入があることを知っているお父さんは、お母さんになぐるけるの暴力をふるってでも取ってしまってはしまうのです。こういう生活をずっと見続けて大きくなった太郎君は、お父さんに対しては憎しみに近い気持の反面、いなりになっているお母さんに対しても腹が立つといま

#### ・中卒のお母さんと大卒のお父さん

お母さんは元々は大きな地主の一人娘なのですが、ちょうど高校進学の頃病気をし、そのまま進学を断念しておじいさんの農業を手伝っていました。お父さんはうだつのあがらない三男坊として田舎で埋もれてしまうよりはと東京に出てきたものの、アパート暮らしにも事欠く苦学生だったところをおじいさんに助けられたのが縁でお母さんと結ばれたということです。ところが学費も生活もすべてが丸かかえて面倒をみてくれた大恩あるおじ

いさんが亡くなると、お父さんは待ち構えていたかのよう  
に浮気を始めました。

・羅針盤のない別世界にとび込んで墜落

こうした中で太郎君はお母さんからひたすら有名私立  
中学に入ることだけを期待され、小学校の四年生以来進  
学塾の他に二人の家庭教師をつけられて競争馬のように  
受験勉強に追い立てられた生活をしてきました。この春  
ようやく念願の中学に入れたのですが、入ってみるとび  
っくりすることだらけで自分でもどうしてよいかわから  
なくなりそうでした。勉強は皆よく出来るし、今時、中  
卒のお母さんなどという人は一人もいません。そしてお  
父さんの職業というと医者とか弁護士とかが多く、これ  
まで彼が接してきた友だちとはまるで違うのです。

・学校での劣等感が家での暴力に

合格した喜びを味わう間もなく、自分の一つ一つが引  
け目として感じられ、学校へ行くほどに絶望感が膨張し

ていくようでした。たまれない毎日です。

そんな彼の気持ちを知らないお母さんは相かわらず彼  
に期待を寄せ、勉強勉強と彼を煽り立てるのですが、彼  
はとても勉強どころではありません。

勉強が思うようにはかどらずイライラした時など、お  
母さんに対して「ウルセエ、このクソババア」など悪態  
をついたり、そこらへんにある物を投げてガラスを割っ  
てしまったりしたことが小学校の時にもたまにあったの  
ですが、先日の期末テストで学年の最低だったと先生に  
注意されて帰った日はたいへんでした。「あんな学校へ  
入れやがって」とお母さんに初めてなぐりかかり、驚い  
たお母さんが急いでお父さんに電話をして来てもらった  
ところ、こんどはお父さんに向かって「今更、父親面を  
して何だ」と胸ぐらをつかんでなぐりかかって前歯を二  
本折ってしまったのです。

・彼こそが「家」の改革者

そこで彼が泣く泣く訴えたことは、もう学校も家も何

もかもしやになったこと。お父さんもお母さんもこれ以上今のような状態を続けないで、別れるなら別れるとはつきりしてほしいこと。今のままの状態を続けるなら暴力で徹底的にこの家も家族も破壊することなどでした。

・男性のよいモデルを得て快方に

両親の問題は簡単ではありませんが、お母さんと話し合いを重ね、結局彼は公立の中学に戻ることになりました。そして男性のよいモデルを示すことを目的に、彼は勉強の遅れを取り戻すという名目でお兄さん役の大学生を家庭教師として送り込むことにしました。今までの家庭教師に比べて、二浪をして念願の大学に入ったという青年に、彼ははじめ「二浪？そんなバカに金を払うことない！」と会おうともしませんでした。しかし「そうなんだよなあ。やっぱ二浪はきつかった……」と悪びれもせず、また隠そうともせずを受けとめる青年に彼は重ねてイヤ味を言いつのるのでした。「今度も失敗するかもしれないかった」「また落ちてたら」……とやたらに

「失敗」「失敗」とくり返し、青年がいつ怒り出すか試しているようにも受けとれました。結局その日は自室から出てきませんでしたので、彼は青年にドア越しに言いたい放題で終わりましたが、青年が帰ってから、「世の中には変わった人間もいるものだ。いくら怒らそうとしても怒らない奴がいる。あれは何者だ」と場合によっては会ってもよい様子をみせました。

以来彼は、物心ついてから初めて触れる健康な男性として青年をモデルにし、兄のように慕う中で、父親に見続けてきた、攻撃心を暴発する悪いモデルからの転換を果たしつつあるように思われます。

以上三つの事例はいずれも家庭内暴力ということでも来談した事例です。一口に家庭内暴力といっても、その成り立ちや意味するものが異なることはお分かりのことと思えます。

しかし三人に共通する事は、自分の感情、特に攻撃性をコントロールする能力が年齢相応に機能していないと

ということのようです。

事例1の一郎君の場合には、不快な感情の発達遅滞が思春期まで持ち越され、受験を目前にして、攻撃性と共に爆発的に発露された例といえます。

それに対して事例2の二郎君は喜怒哀楽のある子どもですが、いわゆるしつけのしにくい子どもの例としてとりあげました。もしかして本題に掲げた感情のコントロールの問題ではなく、超自我の形成の問題かもしれません。二郎君の場合のごく幼い時期に母と子の間のしつけの歯車がかみあわなくなり、超自我が育ちにくい関係の中で、反抗期が同年齢の子供に比べて促進され暴力となって現われたかと思われまます。

事例3では目的達成のためには手段を選ばず母親に乱暴をする父親に反発しながらも、初めての挫折を経験して、父親の轍を踏んでいった例です。その後彼の本当の苦しみは、自分がかつてあれほど憎んでいた父親と同じ人間だったということ、つまり父親の血が自分の中を流れているという恐れでした。

思春期は自分の生についても両親に問いかける時期でもあり、太郎君の場合は単に感情の調整の学習以上に深刻な問題を整理しなければなりません。今回は暴力の意味については触れませんでした。家庭内暴力事例に取り組む時には、太郎君の例に示すように暴力によって彼らが何を訴え、どのように整理しようとしているが、それを理解する視点も大切なことを申し添えて今回の稿を終わります。

(東京都立教育研究所)

## 子育ての輪

はるにれの会

榎田 二三子

「おかあさん、大好きよ。」と、しがみついてくる娘。ずっしりと重い娘を抱きかかえる私。「ずるーい。おねえちゃんばかり。」と、くっついてくる下の娘。我家でよく見られる光景です。今、大好きと言ってくれている娘たちには、おかあさんというのが、どんなイメージなのでしょう。

私にとって母は、といえます。いつも背中を見せていた人のように思います。引越してすぐ入った幼稚園で、「おかあさん待っていて。」とたのむのに、いつの間にか帰ってしまった母。家族で山登りに行くと太ってい

た私は、いつもビリ。「待って」と泣きながら登ったこと。生活することも自分の趣味も一生懸命に前進する人です。そのこと自体は、とても素晴らしいことなのですが、子どもである私は常に、私の方を向いてくれない、私の気持ちと違う、こんなのお母さんなんて言えない、お母さんはもっと違うものだ、と現実の母を否定しつづけてきたのでした。ところが、現実には母となり子どもたちを育てていると、自分の母と同じようなことをしているのに気づきます。自分が否定しつづけてきた母と同じ……と思うと同時に、私にとっての母は、私がいやだと思ってきた母こそ母なのだと思わざるをえません。とすると、娘たちにとっての母は、まさに私なのです。今回は、そんな私がいまわりに支えられてきた、母親としての歩みを書いてみたいと思います。

#### 〈仕事をやめる〉

子どもが生まれても仕事を続けるつもりでいた私でしたが、子どもが生まれて半年後から約一年間、父親が単

身赴任でいなくなるとわかり迷いました。子どもが病氣になったら、私が寝こんだらと、不安や心配はつきません。産休に入るぎりぎりまで迷いましたが、のんびり子育てをするのもいいかもしれないと思い、やめることを決めました。ちょうどその頃、友人とかわした会話の中で、「充電期間もいいかもね。」と言われ、子どもが生まれるからやめるというだけでなく、充電期間というところの方が与えられ、その言葉に大いに支えられ、私なりに落ち着いたのでした。

#### 〈井戸端会議に入れない〉

仕事をしていた時には、朝、家を出て夕方帰る生活です。近所の人とは、ほとんど顔をあわすことがありませんでした。おまけにマンションでしたので、ドアを閉めてしまえば、隣は何をする人ぞという感じでした。こんなありさまであるので、子どもを抱いて歩いていても、あいさつをかわしたり立ち話をする相手がありません。よそのお母さんという、子どもそっこのけでお

しゃべりに花をさかせています。私は、それをしらっと見ていました。何をそんなにくだらないことをべちゃくちゃしゃべっているのかしら、時間の無駄だわとか心の中で思いつながらいるのですから、そこへ入っていくことなど考えられませんでした。ところが、井戸端会議をよくやっている今になって思いますと、確かにくだらないことも多いのですが、このくだらないおしゃべりの合間に、子どものおやつ作り方とか、小児科はどこがいいとかいった情報がたくさんあったのです。

核家族に育ち、核家族で生活している私たち都会人にとって、子育ての手助けは育児書と自分が得た情報と、そして身近なところにいるお母さんたちでしょう。お母さんたちというのは、体験を通して話してくれますので、面倒臭いこともあります、その中から自分が必要なることをピックアップしていけば、この井戸端会議も捨てたものではないのです。この頃は、お役所が井戸端会議を作ろうなんていう動きすらあるようですから。

というわけで、子どもが生まれて半年近くは散歩に行

く以外は、ひっそりと家にこもってくらしていました。

〈花屋のえり子さん〉

えり子さんは、我家のあったマンションの下で花屋さんをやっていた人。我家の娘と一日違いで三人目の子どもを出産しました。しばらく他の人にまかせていた店を、子どもが半年近くになり再開しました。この花屋さんには、仕事帰りによく立ち寄りしましたので、どっちのおなが大きいとか立ち話をしていました。ですから、子連れで店に出始めたえり子さんのところへ私も子どもを連れて出かけるようになりました。ちょうどこの頃には、我家は父親の単身赴任に伴い、母子家庭になっていました。一週間近くおとなとしゃべる機会がありませんと、しゃべりたくなり、私も思ぬきのおしゃべりに出かけました。時には、夕方もう皆が家へ帰った頃、娘をおんぶし、店じまいをしているえり子さんのところへおしゃべりをしに行き、ほっとひと息ついて帰ってくることもありました。



離乳食についても、肩ひじ張って頑張っている私に比べ、のんびりしているというか、手をぬいているという

か、私とは対照的に落ち着いているえり子さんでした。

私が、さあ今日これだけ作ったんだからねと離乳食を用意し、さあ食べてと差し出したスプーンを見ただけで、

(とは言ってもスプーンを持っている私の顔も真剣だったのしょうが)泣きだすようになってしまった娘に、いいかげんいやになり、えりさんの所へこぼしに行きました。えりさんの話を聞いて、ああ頑張るのやめたと思ったその次から、娘が食べるようになり、育児ノイローゼにならずにすんだのも、えりさんがいてくれたからと、助けてくれる先輩お母さんに感謝するのでした。

〈ひとりふたりみんな〉

えりさんのところでは立ち話をしていますと、お店のお客さんで子連れのお母さんたちとも話をする機会がでてきました。そんなことから話べたながら、井戸端会議

へも加わるようになり、よその家へ遊びに行くようになりました。

子どもたちは、ひとり遊びの時期から、二〜三人で遊び始め、そしてもう少し大きい集団で遊び始めますが、ここまでの私も同じような経過でした。この時友だちになった人達は、皆第一子の子育て中という人たちで、彼女たちもきつと、仕事の手を動かしながら、おしゃべりにつき合ってくれるえりさんにきつと受けとめられ、支えられていたことだろうと思います。

〈助け合い子育て〉

少しずつ娘の友だちもでき、行き来が始まったところで、我家は引越しをしました。新しいマンションで、近所づきあいゼロからの出発です。ところが、うれしいことに我家から歩いて数分のところへ、えりさんが引越してきました。新しい生活の場で、新しい人間関係を築いていくのは、とてもたいへんなことです。まだ、そんなエネルギーを持ち合わせていなかった私は、時々え

り子さんの所へ立ち寄り、おしゃべりをしていました。

マンションでのおつきあいは、どうなったかといいますが、隣の子どもが同じ年齢でしたので、雨の日など呼ばれ、どんなおかあさんかしらと思いつながら伺ったり、また我家へ呼んだりと交際が始まりました。隣の奥様桐子さんは、公園へ出かけた折にも新しく友だちを作ってくるなど、人間関係をつないでいくのが上手な方でした。いつの間にか、私も誘われ、四大家族でお昼を食べたりするようにになりました。その間、一歳〜四歳の子どもたちは、子どもたち同志で遊んだり、誰かのおかあさんに本を読んでもらったりして過ごします。ミニ共同保育をやっているようなものでした。私にとっては、お母さんたちとおしゃべりのひと時は、半分は母親、半分はひとりの女であり得る息ぬぎの時でした。

この時期は、四大家族とも小さい子どもが二人いて、どこに行くにも連れて歩かねばならない時でした。買い物には連れて行っても、病院となると元気な子は置いていきたいものです。そんな時、四大家族いますと、どこか

預かってもらえ、とても助かるのでした。お互い様という気持ちがあればこそ、この助け合いは気持ちよく成り立っていました。

桐子さんを中心としたこのグループは、強力な助っ人でした。私が熱をだしてダウンしたりしますと、「ごはんだけ焚いといてね。あとは運んであげるから。」と言ってくれるのでした。悪いと思いつても待っていますと、おかずから、つけもの、味噌汁、おまけにデザートまでつけて運んできてくれました。桐子さんの細かい気配りに感謝すると同時に、ちょっと重たらくも思うのが本心でした。けれども、桐子さんの「私も前のマンションでやってもらってきたのだから。あなたもどこかで自分ができる時に誰かにやってあげればいいのよ。」という言葉に、ああそうか、今私はあまりできないけれど、どこかで、できることがあったらやってあげれば、まわりまわっていくんだなと思ひ、気分が少し軽くなりました。

この四大家族のこの時期は、お互いがお互いの助けを必

要としていた時でしたので、関係が気持ちよく成り立っていました。子どもが幼稚園、小学校と進み、そう助けはいらなくなり、また身近すぎて腹をわって話せないことが出てきたりすると、お互い様でなくなってしまいました。子どもから離れ、ひとりの時間もできてきますと、皆が集まっておしゃべりをする意味もなくなり、全員が集まることもなくなります。共同保育が必要とされているところにでき、それがまた終わりになっていくのを見ますと、このグループも小さいながらも共同保育、助け合い子育てだったのです。

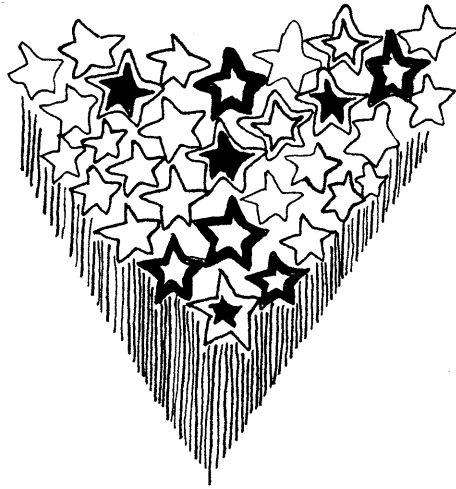
#### 〈井戸端会議を越えて〉

助け合い子育ての頃、私は第二子の妊娠、出産、子育てと忙しく、ふたりの子どもを連れて出かけることはとてもできない状況でしたので、地域での生活をじっくり過ごしていました。下の娘が一歳になり、食べることや昼寝の時間が幼児に近くなったため、連れて出かけるのも容易になりました。そうしますと何かやりたい、動き

だしたいとむずむずしていた虫がおき、結局、大学の子連れ研究会、はるにれの会の事務局の集まり、はるにれの会主催のプレールームと月六回程、都心へ通うことになりました。今思いますと、ひとりをおんぶし、ひとりの手をひき、片道一時間以上かかってよく行ったと思います。行きはよいよい帰りが怖いで、ひとりはず中で昼寝、上の娘はねむくて階段が登れなくなり、どうにもならなくなると、おんぶに抱っことなります。こんなに大へんな思いをしてまで、なぜ通ったのでしょうか。

上の娘が二歳四か月から一年間、地域の共同保育に参加しました。公園での遊び、お散歩、運動会、クリスマスなどの行事と子どもたちと楽しく過ごしました。楽しいのですが、私としては何かもの足りないのです。いつもの井戸端会議の域を越えられないからでしょうか。ここで、同じ基盤を学んだ人々と、もう一度出会いたい。エネルギーをリフレッシュしてから、再び地域にもどって共同保育に参加しようと思ったのでした。

はるにれの会の集まりは、集まる方々の魅力に引き寄



せられていました。はるにれの会の集まりでは、それぞ  
れの日常をかかえながら、日常からちょっと離れたこの  
場で言えることもあるし、違う場で違う顔ができること  
で生き生きすることもありました。

大学で子どものことを学び、仕事も子どもに関係して  
いて、少しは、わかつているつもりでいたりします。  
(これが、大きなまちがいの素になったりするのです  
が。)頭では、わかつていても生活の中では、どうにも  
ならない場面があります。子どもたちも私も、一日の終  
わりはくたびれ、さっきまでは、あんなに元気に遊んで  
いたのに、寝るしたくとなると泣き始めたり、ぐずぐず  
します。そんな子どもたちの気持ちをちょっと元気にし  
て、のせてあげれば、ルンルン気分で動き始めるのはわ  
かっていても、一喝してしまったりします。ますます、  
こんがらがった子どもたちを前に、あーまたやっちゃっ  
た、となるわけです。そんなことを会のメンバーに話し  
てみると、今ここでは、穏やかに話している人も、家では  
私と同じようなことがあると聞き、みんな同じなのだ

と安心するのです。

会のメンバーの子どもたちとのかかわりを見て感じ入り、そして常に前進し生き生きしている姿にひかれ、けれども、やっぱりみんな同じ母親なのだとも思い、二重にながれることをうれしく思っているのです。

### 〈子育ての輪を作る立場へ〉

三年前、新潟へ引越しました。それまで三十年間、東京近辺に住んでいましたので、友人たちもほとんど関東です。それが皆遠くなってしまい、また新しい土地でゼロからの出発でした。共同保育や児童館などを探してみましたが、これといったものがなく、自分で作っていくより他ありませんでした。社宅内での行き来、お散歩会、冬の間の我家開放デー、親子劇場、自主保育グループ作り、そんなステップを踏んで、今、動いています。

子どものことや子育てで何か悩む時は、よいことで悩む人は少ないでしょう。困ったなと思って悩みます。自

分が悪いのか、子どもがどこか変わっているのか、今までの育て方が悪かったのかと思います。けれども違うのですよね。それぞれの歩いている道筋が違うだけで、みんな山あり谷ありの道を歩いていると思うのです。高い山を簡単に越えてしまう人もいれば、長い時間かかる人もいるかと思えば、まわり道をする人もいます。

高い山を越えられても、谷を渡れない人もいるかもしれません。そんな時、困っちゃったと言って、受け止めてくれる人がいて、とても助けられてきました。そんな人たちがいてくれて、ここまでできました。

これまでの子育ての輪は、その場で終わらず、うれしいことに人の輪となって私のまわりに残っています。頼りない母親である私だけでなく、母親を支えてくれているその人々をひくるめて、我家の娘たちに見つめていてほしいと思っています。

先月号にひき続いて、図書を紹介していただきました。中村弓子先生は毎年、素敵な一冊を教えてくださいます。きつと先生は、本棚に宝物をたくさんお持ちなのでしょう。国越健司先生は、音楽科で教えていらっしゃるかわら、東京大学で数学を学ぶ学生でもいらっしやいます。「おもしろい数学の本をご紹介します。」とお願ひしたら、楽しい本をたくさん教えてくださいました。

保育の日々、心豊かに、毎日を過ごしたいものです。

近くの幼稚園の子ども達が先生と集団で帰ってくる。「○○ちゃん、ごあいさつ」と先生の声。「せんせい、さようなら、みなさんさようなら」先生「ごいっしょに」全員「さようなら」ここまでは一本調子。その後、先生「○○ちゃん、サヨナラ」子ども「バイバイ」他の子どもも口ぐちに「バイバイ」

私はいつもこのやりとりを家について聞

いているのだが、どう考えても前半の題目を唱えるような挨拶(?)は必要ないと思ってしまう。この園では六月くらいから十月の運動会の練習がはじまるときく。スピーカーの音が我家にまで聞こえてくる。園児たちの毎日の生活を思う時、「ああ、せつかくの幼児期を……」と暗い気持ちになる。そんな話がある会で話すと、「でも、実際は、幼稚園の九割近くがそれに近い保育内容の園ですよ。」とのこと。ここで又、愕然。

昭和六十一年九月に出された「幼稚園教育の在り方」、六十二年十二月に発表された教育課程審議会の答申を、いかに読み、いかにそれぞれの園に照らし、いかに変わろうとする姿勢を持つか……? ひとつとではない。自分も、もう一度、前述の文章にとり組んでみよう。そして、どの園でも、今、いかに変わろうかという努力がなされていると信じたい。二十一世紀に生きる子ども達のために。

(Y)

### 幼児の教育 第八十七巻 第九号

九月号 ©

定価 四〇〇円

昭和六十三年 八月二十五日 印刷

昭和六十三年 九月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 本 田 和 子  
発行人

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

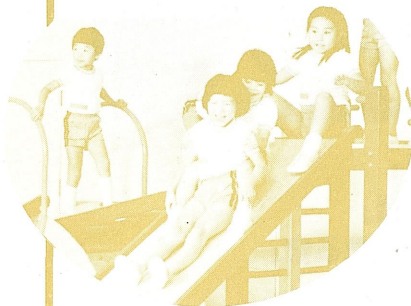
振替口座東京九一一九六四〇番

TEL・二九二二七七八一(代)

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします

※万一製造不良の点がございましたら、おとりかえいたします。

遊びの工夫がいっぱい。子どもの心とからだを育む  
システム遊具。単体での遊びから、コンビネーションやサーキットレイアウトなど多彩なバリエーションが可能。エーションが可能なシステム遊具です。〈実用新案・意匠登録出願中〉



登って、滑って、  
楽しく遊んで体力づくり。

■特長

- それぞれの遊具は単体で遊ぶことはもちろん、スライダー（すべり台）やラダー（はしご）を連結したり、別のセットと組み合わせたりして、多様な展開が可能です。
- スペースやご予算に応じた購入ができます。各年度ごとにパーツを追加していく計画購入もできます。
- 耐久性と安全性に十分配慮したデザイン設計です。
- 室内に明るくマッチする、いきいきと楽しいカラーとデザインです。

のびのび自由に、活発に。元気な子どもの室内遊具。  
**キンダー・トリムランド®**

■生産物賠償責任保険付

総合セットコンビネーション例



総合セット 3025-10 ¥750,000

ジャングルタワー、ろくほくステージ、アーチブリッジ、クライミングボード各1、スライダー、ラダー 各2

ジャングルタワー	ろくほくステージ	アーチブリッジ	クライミングボード	スライダー
3025-01 ¥170,000	3025-02 ¥150,000	3025-03 ¥170,000	3025-04 ¥150,000	3025-05 ¥37,000
●木製 ポリウレタン塗装 ●縦110×横110×高さ145cm	●木製 ポリウレタン塗装 ●縦120×横120×高さ143cm	●木製 ポリウレタン塗装 スチールパイプ 焼付塗装 ●縦90×横180×高さ150cm	●木製 ポリウレタン塗装、 スチールパイプ 焼付塗装、 ビロンネット ●縦93×横177×高さ125cm	ラダー 3025-06 ¥23,000

子どもの心と明日を考える  
キンダーブックの

**フレール館**

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所  
または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

新刊!!

全5巻

# 見る目を育てる 実践シリーズ

- 第一巻 「子どもを見る目」
- 第二巻 「保育実践を見る目」
- 第三巻 「保育計画・形態を見る目」
- 第四巻 「保育の現在を見る目」
- 第五巻 「問題行動と障害を見る目」

保育の本質をしつかり把握するためには、「子どもを見る目」「保育を見る目」を養わなければなりません。本シリーズでは、実践例を通して、わかりやすく「見る目」を解説していきます。

## 監修

森上史朗(日本女子大学教授・東京大学講師)

大場幸夫(大妻女子大学教授)

吉村真理子(松山東雲短期大学教授)

全5巻・A5判・平均228ページ

定価各1,700円・セット定価8,500円

子どもの心と明日を考える  
キンダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または  
本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

